

中経 論壇

経営支援NPOクラブ監事

吉田 仁



国連の発表する幸福度ラシニングで、今年日本は51位と入っているが、その理由として、福祉に対する国民の信頼、互いに支え合うコミュニティ意識の高さなどが挙げられている。社会生活での経済的安心感が基礎になっているように思う。

一方において、ブータンの提唱するGNH(国民総幸福量)という概念がある。こちらは個人の心理的満足が重要な要素である。私たちは技術

の進歩、経済成長によって便利で快適な生活を手に入れてきたが、それは幸福感につながったのか、失ったものも大きいのではないかと。屋台大智(内田洋行のCSR活動)で、野生生物保全協会の西原智昭氏の講演を聞いて、そんな思いを抱いた。

西原氏はアフリカ熱帯林でのゴリラの生態研究や保護活動を通じ、熱帯林の伐採もたらす地球温暖化に警鐘を鳴らしてこられた。私は何度か屋台大学において西原氏の講演を聞く機会に恵まれ、その都度深い感銘を受け、大いに考えさせられたが、今回は熱

熱帯林伐採による生活破壊

熱帯林伐採が、アフリカ熱帯林の原住民族で、かつて「ピグミー」と呼ばれた狩猟採集民に与えた影響がテーマであった。

狩猟採集民は熱帯林の中で生活を営み、自然とともに生きてきた。森林の声を聴くことができ、人類の祖先が最初から有していた、危険を避ける能力を維持し、共同生活を

送る。身分の上下はなく、コーディネーター的な人がまとめている。個々人に能力の差はあっても、互いは対等な関係なのだ。獲物の分配も果たした役割によって差をつけるのではなく、同量を分け合う。彼らには自殺や殺人ということはほとんどない。こうした共同生活では、幸福でありたいと考えることすらないのかもしれない。これは究極の幸福な状態といえるのではないかと。

しかし、有史以前から続けられてきたこうした生活も、熱帯林の伐採により、ここ数年で大きな変化の波に襲われている。西原氏はアフリカ熱帯林の狩猟採集民を日本に招くため、クラウドファンディングを立ち上げ、今年12月に東京でシンポジウムを行う予定である。日本人に狩猟採集民の生活の現状を知ってもらう、自然破壊のもたらす悪影響を直接訴えるためである。

西原氏は、人間の幸福も自然との共生なしにはあり得ないと考えておられるように思う。私はシンポジウムにぜひとも参加し、狩猟採集民の幸福観について聞いてみたいと思っている。

アフリカ狩猟採集民の幸福観